

- Geog., 8, 1-31.
 Oke, T.R., 1979: Review of urban climatology 1973-1976, WMO Tech. No. 169.
 ———— 1981: Canyon geometry and the nocturnal urban heat island: Comparison of scale model and field observations, J. Climatology, 1, 237-254.

- Parry, M., 1967: The urban "Heat-island", Biomet., 2, 616-624.
 Yamashita, S., Sekine, K., Shoda, M., Yamashita, K., and Y. Hara, 1986: On relationships between heat island and sky view factor in the cities of Tama river basin, Japan, Atmospheric Environment, 20, 681-686.



近藤純正著
 夢冰山

東北大学生協同組合
 B 6 判, 147頁, 980円

東北大学の近藤純正氏が書かれたユニークな本を紹介したい。「夢冰山」とは何か。北極海の氷山を仙台市に運んでくるプロジェクトである。昭和62年7月18日から9月28日まで仙台で開催される「未来の東北博覧会」のイベントの1つとして、1万5千トンの氷山をアラスカから仙台湾に運び、真夏の仙台港で入場者に北極体験をしようというアイデアが仙台市の一市民から提案された。近藤氏は、熱収支の専門家の立場からこの企画に対して意見をいうことを求められた。「氷山は暖い海では何億トンという大きさであっても数日間で隔けるので、そのような計画はだめですよ」と答えたのだが、数日後、海水に直接触れなければ可能かも知れないと考えられるようになった。そして、「夢冰山」のロマンに共感し、この計画に深くかかわることになった。

本書は、その発端から実現までの経過を物語のように記録したものである。「夢冰山は貴重な大実験と考えられますので、記録に残しておかねばならないと考えました。たとえ夢冰山が夢に終わったとしても、なぜそうなったかを記録に残しておくことは、いろいろの面で意義深いと思いました。」その経過は、思いつき、意義、冒険、設計、資金、国際問題、観衆の熱気、最後の実験、夢の実現へ、人物の紹介、暗礁、希望という表題のもとにドラマティックに語られる。

しかし、本書のユニークさは、単なる経過報告に終わっていない点にある。「夢冰山」という具体的な話を狂言回にして、実に多くの科学の話題が述べられているのである。

著者は風呂に氷を浮かべて融解実験を試みる。「いよいよ実験です。1kgの氷を風呂の中に入れました。びちっ、びちっ、と音をたててひびが入りました。これが1500万倍の本物の夢冰山だったら、どんな音がするでしょうか。北極海では予期せぬことが起こるかもしれません。ひびは実際には大きな割れ目ですから、氷の上で作業中の人が落ちたりしないように十分な対策が必要です。」といて、氷の融ける速度について話を進めていく。このような考察は、氷山をいかに融かさずに運ぶかという問題に関連して必要になってくるのだ。この他にも、ほとんど水中に沈んでいる氷山をどのようにして船に乗せるのか、観衆の熱気がどの程度氷山を融かすのか、仙台湾上で氷山が融けたらどのような影響があるのか、などの困難な問題を具体的に議論していく。さらには、アラスカやグリーンランドの自然、地球全体の気候にまで話は発展していく。

近藤氏の学問の特徴は、常に現実的なアプローチをとることだと思う。机上の空論を論じるよりは、実際の応用に耐える研究を行うことである。このような研究者が「夢冰山」というようなロマンとまともに取り組んだのは意外であるが、氏の力量がこの夢をほとんど正夢にしたともいえる。著者の若々しい意欲に敬意を感じた。

(東大・海洋研 木村竜治)